銀杏

発行所
〒792-0835
新居浜市山根町8番1号
曹洞宗瑞應寺専門僧堂
編集発行人　村上徳存
電話(0897)41-6563
FAX(0897)40-3127
毎月1日発行
（振替 01330-2-31918 瑞應寺）
印刷所　東田印刷株式会社

碧巌録物語独語【七】

―佛心を育てる―

後堂　門原信典

「普照の序」⑥

【蚊が鉄の牛を咬む。】

銀山鉄壁、孰か敢て鑽研せん。蚊の鉄牛を咬むがごとく、口を下すに為し難し。

【銀山鉄壁】

銀と鉄、山に壁。銀と鉄は堅くて穴を開ける事も出来ない、山と壁は険峻にして登り難い。「雪竇様のお示しは大きく険しい山のようでとても簡単に登れるようなものではない。実に厳しく難しいものである」という表現です。

ヨーロッパでは、山は悪魔の巣窟。ですから登頂に成功すると、人間の能力で悪魔の山を克服したので「征服」と言うそうです。

しかし、東洋では聖山、霊峰です。仰ぎ見るもの、畏敬の対象で、見守ってくださる存在、決して征服という人間の欲望、自己満足の対象ではありません。

【孰か敢て鑽研せん】

鑽は錐で穴を開ける、研は研磨、磨き極める事。雪竇禅師のお示しを深く極め尋ねる事は誰でも出来る事ではない。

何故か、私達凡夫の思いや分別、好き嫌いとか損得とか比べ合いを基準にして碧巌録を読んでも到底及ばないのです。

【蚊の鉄牛を咬むがごとく】

まるで蚊が鉄の牛を刺す様な物だ。歯が立たない、という事です。

【口を下すに為し難し】

ましてや雪竇禅師のお示しをとても言葉で表現する事など出来る事ではない。

それでも私達はみんな何時でもみ佛様に見守られているのです。

先日、ひかり幼稚園の年少児、年中児が瑞応寺の本堂にお参りする、お仏間保育が有りました。

年中さんは流石でした。保護者の方に見ていただきたい程お行儀のよいきちんとしたおまいりと坐禅でした。

それを見て思い出した事があります。

私の自坊は鳥取県の山の中のお寺ですが、近くに今は閉園となっていますが、保育園が有り、そこの園児達が月に一度お寺まで歩いて坐禅に来ていました。

園児と侮るなかれ、二十分間ジッと面壁坐禅。もちろん年少さんの初めての坐禅は、坐蒲の上でデングリ返りや、枕にして寝転んだり、ジッとしていないのが子供、とても坐禅とは言えませんでした。

それでも継続は力なり。学ぶことはまねること。年長さん達の姿を見ながら見様見真似、だんだんと形が調ってきます。保護者の方がたまたまお寺に来られた時、こっそり覗かれて「すごいなあ」と驚かれたり、子供達の坐禅を見守ってくださるようにと童の仏様を彫って下さった佛師の川島さんは、子供達の坐禅の写真を見て「とても美しくて感動します」とまで言われました。

年少さんから通ってきていた五人の子供達もやがて卒園し、小学校中学校へと成長していきました。

今年の三月十一日、夕方六時の鐘撞きが終わって作務の片づけをしていたら、六・七人の中学生位の子供達が薄暗い中、賑やかに手を振りながら参道を上がってきます。

先頭の見覚えのある少年が、いきなり「中学校卒業の挨拶に来ました」と言ってくれました。保育園時代坐禅に来てくれた五人の子供達と、弟と妹もついてきて七人でした。

みんなそれぞれに希望の進路も決まり、自信と喜びと希望に満ち、その子供達の成長した姿に接し、言葉には表せないくらい嬉しくなりました。本堂で記念撮影、帰る時には、時ならぬ鐘を一人ひとり願いを込めて撞きました。

卒業式が終わって、保護者の人達と子供達は、みんなで集まるのは最後になるかもしれないと、コロナ禍ではあったけれど保育園に通ったメンバーでお別れ会をしていたそうです。

保護者の一人は「ふと気が付くと子供達の姿が無く、恒例の肝試しに行ったくらいに思っていました。お寺に卒業の挨拶に行ってきたと聞いて、私達もびっくりし、感激しました」そして、「幼い頃と変わらずに微笑み、励ましてくれる人、訪れる場所がある事が子供達にとって、これからの人生に大きな支えになる事でしょう」と言って下さいました。

佛心とは感謝の心です。

今私達に求められているのは、神様佛様に畏敬の念を抱き、いつでも、どこでも、どんな境遇にあっても見守って下さっている事に感謝する心です。そこからお互いを認め、慈しみ支え合う生き方が出来るのです。

【蚊の鉄牛を咬むがごとく】

読んだまま、雪竇禅師のお示しが難しくて歯が立たないという意味です。共に佛心を育てる蚊子の如き私の誓願、歯が立たぬかも知れないが、誓願し続ける事が佛弟子としての勤めと確信しました。

やがて、高校も卒業し、さらに成長し、成人式にも皆で元気で挨拶に来てくれる事を祈り。

（続く）

テレホン法話（〇八九七）四一-〇〇二三

禅のたより

丁寧

もう何年も前のことですが、本堂でのご法事の折、ローソクやお線香を点けたり、お檀家さんが持参されたお位牌やお供え物をお祀りしたりしていました。いつも一人で大阪から帰って来るそのお檀家さんは、そんな私の立ち振る舞いをしばらく眺めていて、「おじゅっさん。私、お経読んでもらわんでも、充分供養できた気がするわぁ」と言い出しました。私が「え?どしたんですか?」と聞き返すと「おじゅっさんが法衣姿で立ったり坐ったり、歩いたりするん見るだけで癒やされるわぁ」「おじゅっさん、なんや伝統芸能の人みたいで、歩く文化財やわ」と言ってくださいました。とんだ自慢話になってしまいましたね。

しかし、私のこの雰囲気は決して持って生まれたものではありません。では、いったいどこで、培われたものでしょうか?

それはやはり、修行時代に違いないと思うのです。私が瑞應寺僧堂へ修行に上がった当時、先輩の修行僧さん方の多くは、ご法事の卒塔婆を書けば「一光老師」に似た字、お拝をしても合掌低頭をしても一光老師…と言った具合でした。だれも真似などしようと思うでもなく、自然とそうなっていたのだと思います。

一光老師とは、瑞應寺僧堂の当時のご住職で、今年二十七回忌を迎える楢崎一光老師というお方です。

一光老師は頭の先から足の先まで、一挙手一投足、誠に丁寧な動作をなさるお方でした。メモ書きひとつとっても、手帳の小さな枠に、これまた小さな字で、「ゆっくり、丁寧に、細かく」書き込まれていたのを思い出します。客人との応対でも本当に懇切丁寧なお心遣いをされていました。

修行僧を指導するお坊さんとしても、五十年間六百名を超える修行僧一人一人に、手を緩めることなく、時に厳しくも、丁寧なご指導をしてくださいました。

この「丁寧」という字は二文字ともに口偏を付けて「叮嚀」とも書き、二文字とも「ねんごろ」という意味になります。

老師のご生涯は正に曹洞宗の宗風「作法是宗旨」そのものであったと思います。それは、お釈迦さま、永平寺の道元禅師さま、そして令和六年に七百回忌を迎える総持寺を開かれた瑩山禅師さまのみ教えを実践されたご生涯でありました。

恩返しは恩送りなどと申します。老師の薫陶を受けた者の一人として、老師の姿を自分に重ね合わせ、心を尽くして丁寧に、丁寧に、生きていかねばと思うのです。そしてそんな私の立ち振る舞いや一言一句が誰かの心に伝わって、池に石を投げると波紋が次第に広がっていくように、また、他の誰かに広がっていってくれたならば、それこそが老師への恩返しであり、恩送り。一佛両祖のみ教えにかなう生き方だと思うのです。

香川県 南隆寺　大石光昭師

令和四年六月十一日～二十日

信仰から にじむ行ない

私は日曜坐禅会のとき、最初のおよそ十五分、坐禅をしている人の眠気を覚ましたり、注意を促したりする『警策＝きょうさく』といわれる棒を持って坐禅堂の中を巡ります。

先日の坐禅会の折、いつものように警策をもって歩いていると、履き物の底に何かくっついているのか、右足を上げる度に「ペチッ、ペチッ」と音がします。坐禅の邪魔にはなりはしないかと、通る場所をずらしたり、体重移動を微妙に代えてみたりしたのですが、いっこうに音はおさまりません。しまいに足の筋肉が強ばってくるほど四苦八苦していたところに、雨が降り出しました。

するとどうでしょう、つい先ほどまであんなに堂内に響いていた「ペチペチ」が雨音のお陰で一切聞こえません。なんと歩きやすいことか、ホッとしました。

坐禅の後の茶話会では「雨音がとても心地よかった」とか「帰りの傘のことが気になって集中出来んかった」とか「気持ちよく落ち着いて坐れたわ」などと口々に感想を述べ合っていました。

『聞くままに　また心なき　身にしあらば　をのれなりけり　軒の玉水』

こちらは道元禅師さまのお

歌です。降る雨の音を聞こうとか聞かないとかという計らいを止めると、雨音と自分の境が無くなる。雨音に自分がすっぽりと包まれてひとつになった身であるならば……「をのれなりけり　軒の玉水」……正に自分自身が軒の玉水なのだ。とのお示しです。

お釈迦さまや道元禅師さま瑩山禅師さまをはじめ、数多くのお祖師さま方は、悟られた後もずっと坐禅を続けられました。それは、坐禅が仏になるための手段ではないという証しです。自分が坐禅をして、あこがれ求める仏さまになるのではないということです。

自分という仏さまが坐禅をしている。仏さまが食事を頂く。仏さまが字を書く。仏さまが話をする。私たちの普段の生活の行ないも、このように信じて「お釈迦さまならどのように仰るのか、道元禅師さま瑩山禅師さまならどう振る舞われるか」という気持ちで、丁寧に、丁寧に過ごしてまいりましょう。

香川県　南隆寺　大石光昭師
令和四年六月二十一日～二十日

ただ仏法の為に仏法を修むる

お寺の周囲の木々は日々に緑の色を濃くし、梅雨の雨に潤い、鮮やかさを増しています。燕のつがいはひっきりなしに空を往復をして、巣上で口をパクパクさせて待つ雛たちに、休むことなく餌を運ぶこと大忙しです。

そのような子育ての場面をご覧になったのか、道元禅師さまは永平学道用心集というご文章の中で、「見ずや小虫畜類の、其の子を養育するや、身心艱難し、経営苦心して畢竟長養すれども、父母においては終に益なきことを。然而あれども子を念う慈悲、小物すら尚お然くなるは、自ら諸仏の衆生を念いたまうに似たり」と示されています。

小さな虫も動物も、身も心もすり減らすような苦労をして子育てをしている。やがて子らは育って巣立っていくが、父母にとっては結局何の得にもならない行為だった。とはいえ、子を育む慈悲心は小さな生き物にも備わっていること、それはまるで、仏さまが我々衆生を慈悲の眼で見守ってくださっている様子と同様に感じられ、損得抜きの子育ての尊さに注目するようにと示されます。

先のご文章には「有所得の心を用て仏法を修すべからざる事」というタイトルが付きます。修行を手段とし、その結果として、悟りを得てやろうとか、功を積んで名誉を得てやろうなどという、所得を求めるような態度を諫め、無所得の修行を勧めておられます。

我々日常の行動原理は、損と得、好と嫌、善と悪、といった二元的な見方からの選別と取捨に基づいています。選別と取捨を全くしない暮らしをすれば、勿論、仕事も家庭も経営は立ち行かず破綻してしまい、あいつは阿呆者であると誹りを蒙ることとなるでしょう。

しかしながら、こと仏法の修行としては、「ただ仏法の為に仏法を修むる、乃ち是れ道なり」ともお示しのように、よこしま無く修行する現在が、過去と未来とを繋げ、絶え間なき道ならしめるのでありましょう。

初めて僧衣を着せてもらった時、初めてお寺の修行に入った時、その時々の初心を懐いつつ、励んでまいりたいと思います。

瑞應寺専門僧堂　監事　阿部信宏
令和四年七月一日～十日

夏安居
景物移遄夏再来
叢林三月隔塵埃
門前白藕著華未
祖室伝灯古梵台

書記　慧岳

夏安居
覓道求師擲教鞭
安居佛國好斯縁
鐘声鳥語稍成韻
端坐五更如奏絃

今夏首座　徳彦

大通寺首座法戦式
安居仏国学身心
十劫芳筵弄没琴
挙唱拈華微笑話
威儀行道古来今

宮浦大通寺首座　英俊

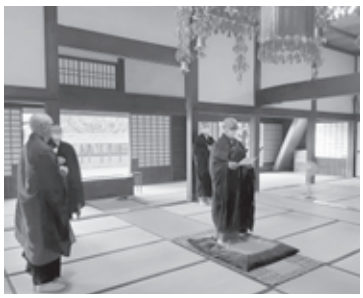
夏安居
安居両月日周遷
佛國門関隔世縁
緑樹叢中只管行
欲模歴歴祖師禅

辦事　清之

■恵光忌・大玄忌

七月十日（日）、当山元西堂、橋本恵光老師の示寂忌正當諷経を楠本直録の献供により、楞厳会朝課罷に厳修。

七月二十日（水）には当山二十九世楢崎一光老師の示寂忌正當諷経を門原後堂のもと厳修。

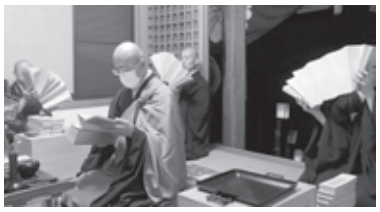

大玄忌

恵光忌

■筆供養・弁天大祭

七月十五日（金）（旧暦六月十七日）に毎年恒例の筆供養・弁天大祭が行われた。

当日午后より山門頭広場の筆塚前にて、門原後堂導師にて古筆の供養が行われた。夕刻には、弁天堂にて、越海講師導師のもと諷経が厳修された。


弁天大祭

七月の日鑑

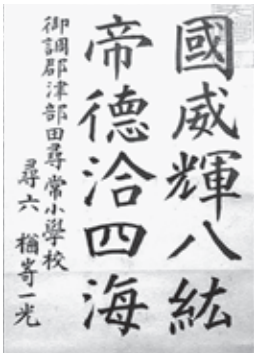
一日　祝祷
三日　日曜参禅会
五日　参玄会(七日迄)
十日　恵光忌
十五日　祝祷・略布薩
十五日　筆供養・弁天大祭
十六日　水施食
十八日　観音講・勉強会
廿日　大玄忌
卅一日　略布薩

八月の予定

一日　祝祷
二日　大施食
七日　日曜参禅会
十日　住友展墓
十五日　祝祷・略布薩
十六日　水施食
十八日　観音講・勉強会
卅一日　首座法戦式・略布薩

白眉殿展示物

（29世 大玄一光 書）



△国威輝八紘
帝徳洽四海
天覧の書
尋常小学校六年生の時

◁水遠山長
八歳十ヶ月の時

鐘声

八月ヒロシマ・ナガサキ。夏が来ると私は鮮明に思い出します。約四十年前、祖母から原爆投下当時の話を聞きながら歩いた原爆資料館の記憶を。終戦から七十七年が経ちますが、多くの人によって忘れてはならないものを後世に伝える努力が続けられてきました。

同様に瑞應寺でも、古き良き伝統が守られ伝えられています。私も今、その伝統を伝えて頂いています。過去の人々・未来の人々への責任を感じながら、しっかりと受け継いでいくお手伝いをさせていただきたいと思います。　今夏首座

開山忌講演会のお知らせ

道元禅師の教え入門
『学道用心集に学ぶ』

九月二十一日午後四時講演　六時開山忌逮夜
二十二日午前九時講演　十一時開山忌正当

講師　駒澤大学 教授　岩永正晴 先生

両日共に一般の方にもわかりやすくお話ししていただきます。

入場無料です。お誘い合わせておまいりください。

尚、コロナ感染状況により、変更の可能性もあります。

銀杏感謝録

茨城県　常光院水戸精舎　殿
大阪府　松田志保子　殿
鹿児島県　大中寺　殿
鳥取県　同慶寺　殿
鳥取県　入江順子殿
北海道　瑞英寺　殿
広島県　養徳院　殿
静岡県　成願寺　殿
大分県　浄土寺　殿

（令和四年四月十九日受付迄）